

きょう づか ばら い せき
経塚原遺跡

経塚原1号古墳

経塚原2号古墳

三日市場経塚原牛首峠農道整備に先立つ
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1995年3月

長野県飯田市教育委員会

きょう　　つか　　ぼら　　い　　せき
経　塚　原　遺　跡

経塚原 1 号古墳

経塚原 2 号古墳

三日市場経塚原牛首峠農道整備に先立つ
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1995年3月

長野県飯田市教育委員会

序

最近、新聞に考古学関係の記事がよく見受けられます。各地で発掘調査が行われていることの現れ、言い換えればそれだけ開発が進んでいるのだとも取れます。この飯田市においても公共事業や民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査は年々増加しております。地域社会が発展することは喜ばしいことですが、今日まで伝承されてきた文化財を後世に残し伝えていくこともまた大切なことと考えます。

実施される発掘調査からは、先人たちの生活の様子を示す事実がつぎつぎと確認されております。これらの事実ひとつひとつの積み上げが地域の歴史再構築に大きな役割を果たすことはいうまでもなく、発掘調査による記録保存は、破壊せざるを得なかった文化財を後世に伝える方法でもあるわけです。

今回発掘調査を実施した経塚原は、飯田市三日市場と中村の境に位置し、現在運動公園の整備が行われている場所でもあります。この地に所在する経塚原古墳は『虫封じの塚』とも『村境の塚』とも呼ばれるもので、昔から幾多の伝説も残っている場所です。

今回の調査では、この古墳と考えられていたものが江戸時代に作られた一石経を納めた経塚であることがわかりました。

内容については、本文中に記したとおりであり、今後の研究に供されることを希望しております。

発掘調査は、その結果として文化遺産の破壊になるわけです。できることならば、現在までそうであったように、残っているままの姿で後世に継承していくことが私たちの責務だといえます。しかし、現在生きている私たちにも生活があり、地域全体における今日的な課題解決の必要もあるわけです。地域社会の発展と文化財保護が調和のとれた地域にすることがこれからの重要な課題だと考えます。

最後になりましたが、調査実施にあたり、その趣旨を深いご理解をいただいた関係各位と、発掘作業・整理作業に従事した調査関係者の皆様に心よりの感謝を申し上げて、刊行の言葉といたします。

平成7年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

例 言

1. 本書は飯田市中村地籍における三日市場経塚原牛首峠農道整備に先立つ埋蔵文化財包蔵地経塚原遺跡および経塚原1号古墳・2号古墳の発掘調査報告書である。
2. 調査は飯田市農村整備課の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は平成6年5月12日～平成5年5月21日まで現地作業を実施した。整理作業及び報告書の作成作業は引き続き実施した。
4. 発掘調査及び整理作業では、遺跡名の略号はKZBとし、古墳については、その後にK-1、K-2を付した。
5. 本調査は道路計画図におけるセンター杭No0+10.0と古墳上にある測量基準のセメント杭を結び基準線とした。基準線の方向はN75°Wを示す。
6. 本書の記載は、遺構図を本文に併せて挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
7. 本書は吉川豊が執筆した。なお、本文については小林正春が加筆・訂正を行なった。
8. 本書の編集は、調査員全員で協議により行ない、小林正春が総括した。
9. 本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

目 次

序	I
例 言	II
目 次	III
I 経 過	1
調査に至るまでの経過	1
発掘調査の経過	1
調 査 組 織	2
II 遺 跡 の 環 境	3
自 然 環 境	3
歴史環境および周辺遺跡	9
III 調 査 の 結 果	9
(1) 経塚原1号古墳	9
(2) 経塚原2号古墳	15
(3) 経塚原遺跡	16
IV 引 用 参 考 文 献	16
V 写 真 図 版	17
VI 抄 録	40

I 経 過

1. 調査に至るまでの経過

飯田市中村地籍に所在する牛首峠の農道整備工事は飯田市農村整備課が計画した。現在整備が進められている運動公園の南、段丘縁部を通る農道は運動公園通りから峠を越え竜丘地区の上川路大畑地籍へ通じている道であるが、かなり細く曲がりくねっていた。中部電力は電力の安定的な供給を計るため、各地において変電所・送電用鉄塔の建設を実施している。その一環として、中央幹線からの電気を伊賀良方面へ引き込むため、大畑地籍に鉄塔を中村中川地籍に変電所を建設する計画がある。この鉄塔を建設するためには工事用道路が必要となり、双方の事業を合わせた格好で進められることとなった。

この地は、埋蔵文化財包蔵地経塚原遺跡内であるため、県文化課の担当者を交えて保護協議を実施した。協議結果は、古墳については発掘調査を実施、記録保存とする。包蔵地については試掘を実施し再度協議することとした。

2. 調査の経過

協議結果に基づき農道拡幅部分の試掘を実施した。基本的には2×2mのグリッドを設定し地下の様子を調べた。しかし、連続したローム面を確認したのみで遺物・遺構は検出できなかったため、調査不要と判断し発掘は行なわないこととした。試掘の終了後、1号古墳の全面調査にかかった。それと並行して2号古墳の調査も実施した。

頂上に石碑が立っている1号古墳は表面を覆っている草を剥ぎ取る作業から始めた。石碑の脇には、小石がざっしり詰まった穴が確認できた。たくさんの石の中で墨により字の書かれたものが見つかったため、全部の石を遺物として扱った。調査の中心はこの古墳をたちあわることであった。現地での調査期間は10日であった。

整理作業は上川路の飯田市古墳資料館において引き続いて実施した。まず、持ち帰った石の洗浄および注記をした。その時点で石の表面に墨の痕跡が認められるものもあり、数を数えてみたら、総数70,000余個あり、そのうち6,000個以上に字らしきものが書かれてあった。それを、字の種類毎に分ける作業はかなりの時間を要した。

図面の整理、トレース、遺物の写真撮影を実施しながら、原稿の執筆も行ない、報告書の刊行となった。

3. 調 査 組 織

1) 調 査 団

調査主任	小林 正 春	馬場保之					
調査担当	吉川 豊						
調査員	佐々木嘉和	山下誠一	吉川金利	下平博行	伊藤尚志	福澤好晃	
作業員	伊藤禎七	井上恵資	恩沢不二子	佐々木文茂	柳原政夫	清水三郎	
	代田和登	鈴木重雄	菅沼和加子	仲田昭平	服部光男	広井保	
	牧内達雄	松井明治	松下成司	松下直市	松下光利	宮下貞一	
	山田康夫	吉川和夫					
	新井ゆり子	池田幸子	金井照子	金子裕子	唐沢古千代	木下早苗	
	木下玲子	橋原勝子	小池千津子	小平不二子	小林千枝	佐々木真奈美	
	佐々木美千枝	佐藤知代子	斉藤徳子	関島真由美	田中恵子	中島真弓	
	丹羽由美	萩原弘恵	平栗陽子	福沢育子	福沢幸子	古根素子	
	牧内喜久子	牧内八代	松島直美	松本恭子	三浦厚子	南井規子	
	宮内真理子	森藤美智子	吉川悦子	吉川紀美子			

2) 事 務 局

飯田市教育委員会社会教育課

横田 穆	飯田市教育委員会社会教育課長
小林正春	飯田市教育委員会社会教育課文化係長
山下誠一	飯田市教育委員会社会教育課文化係
吉川 豊	"
馬場保之	"
吉川金利	"
下平博行	"
伊藤尚志	"
福澤好晃	"
岡田茂子	飯田市教育委員会社会教育課社会教育係

II 遺跡の環境

1. 自然環境

伊賀良地区は飯田市西部にあり、飯田市街地の南西に位置する。北側は鼎地区、東側は松尾・竜丘地区、南側は山本・三穂地区に接する。

飯田市は南アルプスと中央アルプスにはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。みかけ上は天竜川による河岸段丘地形を成すが、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴ない盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。伊賀良地区の場合、西側と東側で大きく地形が変化している。西半は中央アルプスの前山である笠松山(1271m)・高鳥屋山(1397m)の東山麓にあたり、飯田松川・茂都計川をはじめ、笠松山・高鳥屋山から流れ出す入野沢川・南沢川・滝沢川・新川等の河川によって形成された広大な扇状地が広がる。扇端はおおむね北方地籍では新井付近、大瀬木で伊賀良小学校付近、中村の長清寺付近であり、これより西側は傾斜の比較的急な斜面となっている。扇端の一部は前述の線を大きく越えて東側に伸びており、下殿岡地籍まで達するものもある。扇端付近ではこの扇状地が小河川により幾重にも複合して形成されているため、比較的湧水に恵まれ、今日でも横井戸を利用している住宅がみられる。扇状地の形成に大きな役割を果たした小河川は現在は堆積作用より下谷作用に転じているが、浸蝕力は弱く、解析谷の規模は比較的小さい。これに対し、地区の東側は基本的には高位の段丘面を成し、扇端から離れるほど地下水位が低くなる。古代末以来、この高燥な地帯への井水の開削が繰り返し行なわれ、大井をはじめ多くの井水が開けられているほか、地区内の大小河川には人為的な改変が加えられてきた。

臼井川と中川に挟まれた細長い舌状の台地は中央道付近にある大堤から始まり、牛首峠まで続く。最大幅は運動公園通りが通過するあたりで約1kmある。この台地は緩く南東に傾斜している。三日市場と中村地籍の境界はこの台地の南よりにある。経塚はこの村の目安になっていたものと考えられる。しかし、現在運動公園の建設が進められており、以前に比べ地形がかなり変わってしまった。経塚原の標高は530m前後である。

2. 歴史環境および周辺遺跡

伊賀良地区は埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布しており、これまで発掘調査がなされた遺跡は、学術調査による立野・山口・西の原各遺跡、中央自動車道建設にかかる志原・上の平東部・寺山・六反田・大東・酒屋前・滝沢井尻・小垣外(辻垣外)・三壺洲・上の金谷各遺跡、一般国道153



- 1 経塚原遺跡 2 三日市場大原遺跡 3 三日市場中部遺跡 4 宮の先遺跡
 5 三日市場大堤遺跡 6 宮原遺跡 7 中村中平遺跡 8 中川遺跡
 A 経塚原1号古墳 B 経塚原2号古墳 C 丸山2号古墳 D 日降前古墳
 E 宮原1号古墳 F 三日市場城跡

第1図 調査遺跡および周辺遺跡位置図

号飯田バイパス建設にかかる殿原・八幡面・小垣外各遺跡、広域農道西部山麓線建設にかかる飯田垣外・火振原・梅ヶ久保・細田北・大原・直刀原各遺跡、諸開発に伴う中島平・宮ノ先・酒屋前・鳥屋平・下原・高野・公文所前等の各遺跡がある。こうした文化財に表われた先人達の足跡は縄文時代早期までさかのぼる。立野遺跡や山口遺跡といった縄文時代早・前期の遺跡は主に笠松山麓の比較的標高の高い所に立地している。前期終末では辻垣外・殿原遺跡等扇状地の扇端付近の遺跡で竪穴住居址が調査されている。中期の遺跡は伊賀良地区の広範に分布しており、中央自動車道・西部山麓線路線にかかる扇状地上の諸遺跡や下原・公文所前といった段丘上の遺跡がある。ことに下原遺跡では該期の中心的役割を果たしたと考えられる大集落の一面が調査されている。後期・晩期の遺跡としては、中村中平遺跡において祭司・墓域遺構が確認され、たくさんの貴重な資料が出土している。また、断片的な資料ではあるが、酒屋前・辻垣外・殿原遺跡でも遺構・遺物が確認されている。

弥生時代においても集落立地は基本的に前時代と変わらないと考えられるが、前期・中期についてはなお不明である。後期になると、遺跡数が増加するとともに調査例も増す。これまで調査された遺跡としては大東・上の金谷・酒屋前・滝沢井尻・宮ノ先・中島平遺跡等がある。該期の集落展開としては、扇状地末端の湧水線および西方前山から東流する大小河川を利用した水田経営と高位段丘上での陸耕を基盤とするものが考えられる。殿原遺跡ではこれまで90軒にのぼる竪穴住居址が調査される等、大規模な集落が営まれていたことが判明している。また、細田北遺跡では標高700mを超える高所から3軒の竪穴住居址が発見されており、人口の爆発的な増加とこうした高所にまで生産基盤を拡大するまでに至る生産力の向上を看取できる。

古墳は伊賀良地区では52基が確認されているが、現存するものは9基にすぎない。隣接する竜丘・松尾地区に比べ数も少なく、いずれも規模の小さい円墳である。三日市場・中村地区で経塚原古墳以外では大名塚古墳は現存するものの、消滅したものととして中村狐塚古墳・寺畑古墳・宮原2号古墳がある。また、同時代の集落址の調査例は少なく、前期後半の上の金谷遺跡、後期の三壺淵・中島平遺跡が調査されているのみである。遺跡数も前時代と比べると著しく減少しており、湧水・湿地を控えた集落の展開が考えられるが、なお詳細は不明といわざるを得ず、今次調査結果は重要な知見を追加したと確信する。また、地区内北方地帯には条里が敷かれたとも指摘されており、水田経営の定着した姿を想定することができよう。

奈良時代の遺構は、中村中平遺跡で掘立柱建物址を初めて調査したが、地区内を古代東山道が通過し、具体的な場所は特定できないが「育良駅」があったとされていることから、今後の調査によりさらに資料が確認される可能性はある。平安時代については、その末期には伊賀良庄の名が文書に登場する。そのなかには中村・久米・川路・殿岡が含まれることが文献等により明らかにされており、当地区がその中心的な位置を占めたことが考えられる。当地区における大規模な井水開発の歴史は、この時代にはじまるともいわれている。殿原遺跡の調査結果はこうした説がある程度裏付けられるものといえる。一方、これまで実施された発掘調査の結果、六反田・滝沢井

尻・小垣外・三壺淵・上の金谷・宮ノ先・公文所前遺跡等地区内のはほぼ全域にわたる。中でも下殿岡公文所前遺跡で住居址が複数確認された、集落址の一部が調査されている。伊賀良庄の成立がどこまで遡るかは不明であるが、この時代の集落が前時代よりも増加することは、この地区の開発が一段と進んだ証左であろう。また、隣接する山本久米地区には真言宗の古刹光明寺がある。胎内に「保延六年」（1140年）の銘を持つ薬師如来坐像があることから、寺の創建はこれより遡ると考えられ、伊那谷の中ではいちやく中央の文化を取り入れた先進地域の一つであったと思われる。また、この時代には三日市場地帯に須恵器を生産した土器（かわらけ）洞窯跡があり、ここで生産された須恵器が下伊那全域に分布するなど、手工業生産の発達が見られる。

中世においては鎌倉時代には北条時政が伊賀良庄地頭であり、以後一族の江馬氏がこれを継いだ。その地頭代が地区内に居を構えたことは疑いなく、鎌倉末期には荘園を自領化していたことが三浦和田文書に窺える。この時代の文化財としては、藤原様式の流れを汲む鎌倉初期の光明寺の阿弥陀如来坐像（国指定重要文化財）がある。

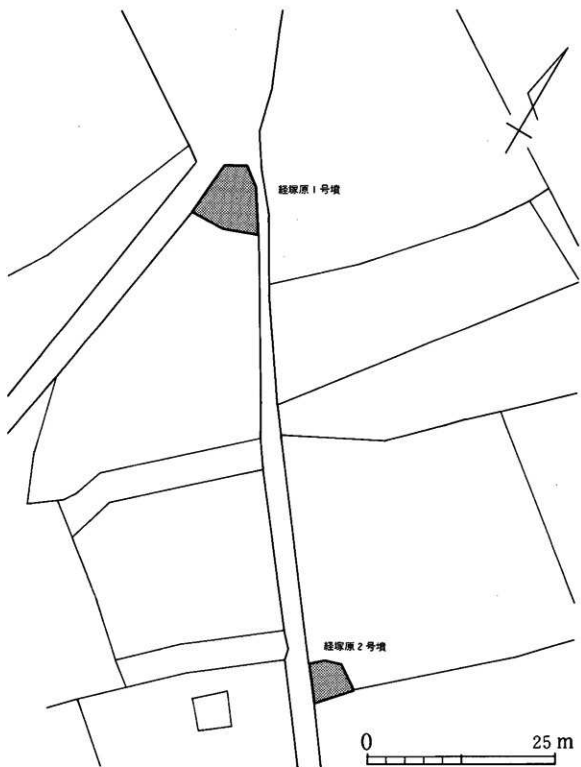
北条氏の滅亡後、信濃守護職小笠原氏は伊賀良庄を与えられ、その下で伊賀良地区の開発は急速に進んだとされる。地区内の井水の大半はこの時代の開発と考えられ、小笠原氏の勢力伸長の基盤として当地区が大きな役割を果たしたといえる。室町時代中期以降、小笠原氏内紛に伴い松尾城・鈴岡城の支城が各地に築かれ、地区内には下の城跡・桜山城跡がある。

この他に中世の資料として注目されるものは、瀬戸市の愛知県立陶磁資料館に収蔵されている常滑焼の壺である。東中村経塚出土とされているが詳細はわからない。

浅間神社を祭る富士塚と呼ばれる人工の山が下殿岡八幡神社境内と大瀬木の藤塚に今も残る。経塚と並んで民間信仰の形態を伝える。

伊賀良地区内には三州街道（現国道153号）と久米街道が通過しており、飯田の北部における交通の要所でもある。

以上、各時代について概観したが、こうした歴史の脈絡の中で、今次発掘調査の成果がどのように位置づけられるかは、本書の内容により明らかにされるといえる。



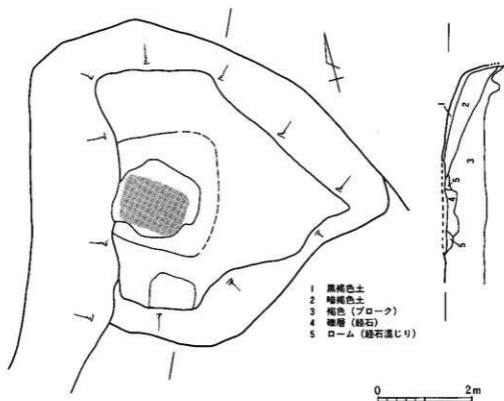
第2図 1号墳・2号墳位置図

III 調査の結果

(1) 経塚原1号古墳

状 況

下中村から三日市場大原へ続く坂道が平坦になるあたりに、1 mほどの高さの塚がある。大きさは6×6 mの不整形三角形を呈しているが、造られた当時は円形だったと思われる。この塚には石碑が建てられている。中央に『石経供養塔』向かって右に『安永三年歳』左に『八月吉祥日』と刻まれており、経塚であることを示している。



第3図 1号墳全体図

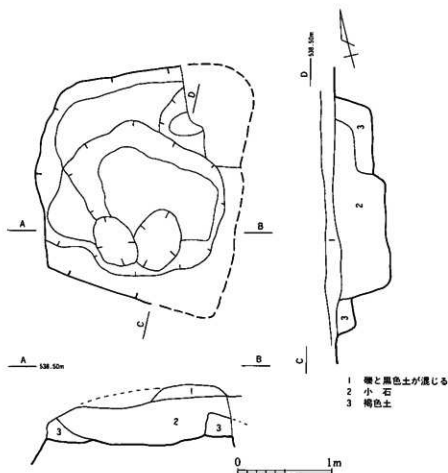
盛土の状況

6×6 mの三角形に近い格好を呈した、この塚の西側は古墳との高低差が1.8mあるが、道路面はかなり削り取られたため、礫を含む黄色砂土が側面に見られる。

表面の草を剥がしたところ、側面から東側にかけて上部に黄色砂土が被っていた。これは、道路拡幅時に削られた地山を盛土の上に積み上げたものと判断できる。南側には石碑が建っているため調査できなかったが、西側に小石の混じった部分がほぼ長方形に確認できた。

セクション調査の結果、盛土と判断できる褐色土は中央付近では80cmほどあるが、北端では10cm程度となる。所々に突き固められたとみられる部分がブロック状に認められる。北側になるにしたがい褐色土は薄くなる。その上に前述の地山が厚さ40cmほどあった。

礫を含む地山の上に堆積するロームの厚さは30cm程度であり、この面が盛土を築いた時期の地表であろう。一部に幅30cmの溝が掘り込まれていたが、覆土は盛土と同じ土色であった。



第4図 1号墳主体部

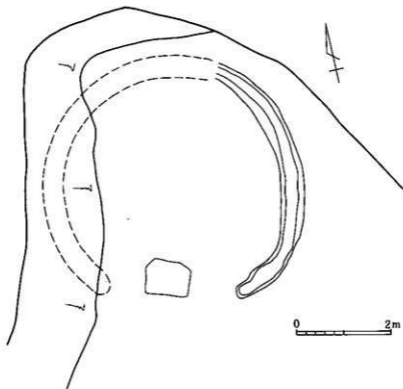
主体部

表面観察で小石の確認できた部分は2.3×2.0mを計る。掘られたこの穴は中央部でやや凹みを持ち最深部で45cmを計る。この穴の中はすべて石材も大きさも様々な小石で埋め尽くされていた。これらの石の中には墨で文字の書かれた一字一石経が混じっていた。

盛土下遺構

セクション調査の時点で確認できた溝は、北から石碑の建つ南側へ弧を描いている。幅が一番広いところで52cm 深さは17cmほどある。状況からみると、直径5.6mの円をなすものとみられる。しかし、石碑の建つ南側では溝の存在が確認できなかった。調査実施部分が盛土半分のみであったため断言はできないがこの部分が入り口の様相を呈しているものと見られる。

この溝が、覆土の状況から判断して塚の造られた時に一緒に埋まっていることから、塚の築造になんらかの関係があるものと見られるが、断定はできない。



第5図 1号墳盛土下部周溝

遺 物

出土した遺物は、主体部にあった石のみであるが、前述したように持ち帰った石の内のほぼ1割に墨書が認められた。文字の種類は判読できたものだけで542種類（別表参照）に上る。文字の種類は、漢字および梵字と見られ、梵字はごくわずかにすぎなかった。しかしながら、稚拙な筆遣いのためどちらとも判断できないもの、石と石・土と石が擦れあったため、墨が剥離してしまったもの、文字であることはわかるが判読できないものが数多くあった。

石材は、花崗岩・砂岩・硬砂岩・緑色岩など様々であり、形もまちまちである。大きさは最大のもので6 cm 四方、最小のもので2 cm 四方程度とまったく揃っていなかった。これらの石はこの周国から集めたものか、文字を書いた人達の近くにあったものかは断定できないが、石の中に河川の流域にしか存在しない硬砂石や緑色岩がまじっていることから後者の可能性が強い。

表

個数	文 字	
57	是	(1種)
25	菩	(1種)
24	佛	(1種)
23	千・為	(2種)
22	衆	(1種)
21	有	(1種)
20	不	(1種)
17	之・久	(2種)
16	大	(1種)
15	以・百・其	(3種)
14	経・日・一・説・方	(5種)
13	言	(1種)
12	無	(1種)
11	者・三	(2種)
10	諸・法	(2種)
9	万・生・故	(3種)
8	廣・智・音・具・道・羅・欲・華・寿・薩・而	(11種)
7	人・得・妙・樂・世・時	(6種)
6	師・天・十・阿・提・爾・力・信・復・宝・知	(11種)

5	當·尊·求·中·上·德·王·我·存·願·善	(11種)
4	人·及·下·眼·平·作·未·堂·第·常·右·福·量·午·月·若·盡·重·見· 憂·隨·神·二·則·非·從·安·思·且·住·變	(31種)
3	吉·宮·小·語·近·光·目·行·車·少·至·滿·塊·宜·皆·金·調·覺·蓮· 滅·咸·乘·間·後·守·主·相·子·山·弟·身·寬·能·注·垂·富·利·界· 良·小·九·丁·井·源·苗·聲·高	(47種)
2	川·念·玄·河·惟·組·過·出·受·多·舍·木·陀·他·女·讚·璦·用·八· 去·丘·夜·終·全·詞·六·牧·然·定·夫·枚·何· ·普·似·供·牛·解· 嚴·亡·便·鎖·僧·吞·俱·舌·回·攻·那·淨·黃·聞·庄·嚴·開·疊·合· 塗·令·性·譽·國·貧·德·敬·宥·藏·像·殊·檢·煩·了·昌·傳·含·欠· 發·持·頭·但·空·五·業·顯·記·喜·死·也·莫·自·性·臣·泊·識·宿	(94種)
1	升·絞·担·連·明·雷·漢·某·止·龜·盒·會·掛·坊·露·雜·才·谷·應· 迦·童·訴·溝·園·夢·稚·乞·甘·田·觀·難·聖·異·備·池·曉·廚·親· 遠·把·快·汲·斗·台·麥·孚·半·共·星·東·吹·性·祇·歲·要·使·遣· 專·鹿·可·因·室·七·草·轉·糸·餘·託·丈·付·土·乎·侍·審·毒·忍· 婆·誹·囹·莊·賦·演·桶·如·均·巢·涯·甕·賽·垂·面·優·雖·歛·種· 塞·亦·元·立·突·符·樹·恒·貝·聽·花·摩·恩·戰·讀·視·礼·役·麗· 風·坂·貌·真·客·溫·興·刃·傷·季·惠·水·飢·流·絞·訊·篋·的·弥· 飾·朱·尺·苑·岑·寺·驚·現·緒·通·諦·祿·沈·取·壁·調·號· ·耶· 長·辨·杖·印·肝·呈·居·官·勝·左·准·巾·寸·迫·春·鼓·飲·却·託· 治·文·徐·賜·胞·宗·省·便·到·晚·迫·霞·浩·村·嬉·正·伯·載·兄· 屈·悉·永·買·門·列·易·壬·肢·定·汗·底·榮·芥·失·牟·啓·鶯·新· 龕·戌·乍·臺·成·謂·緣·族·歎·慮·既·膚·党·廬·四·元·端·條·資· 衣·春·哉·今·剝·名·義·早·深·坏·活·末·呆·搜·分·味·複·註·集· 依·增·段·恭·脫·徑·洪·雷·梵·境·詩·旅·命·綱·島·南·物·坂·施· 曲·埠·齊·泥·弊·祖·否·聰·沒·將·眸·水·市·訊·樣·閣·燒·宜·囹· 穗·穫·般·竜·嵐·珠·異·邊·掌·爭·畏	(295種)
		計 534種

ま と め

紙本経や一石経の経典を納めた経塚は十世紀後半に畿内で始まったとされている。一石経の経塚は、中世に出現している庶民が主体となって営まれるようになったのは十六世紀後半からで、江戸時代になってから盛行するようになった。これは共同体（村など）の病魔退散や五穀豊饒を願って一石経の書写を多数の参加により行なうものであったようだ。一石経は小石などに経典の字句を書き移したもので、これを地中に埋納し、経塚とすることは近世になって隆盛した。一つの石に一字ずつ書写したものを一字一石経といい、複数文字の場合は多字一石経と呼ばれている。

今回確認できた字の種類は500種類以上となったわけであるが、これらの文字はなんらかの糸を持って書かれているに違いない。しかし、その意図は明らかにできなかった。いままでの調査結果では多くの場合経典を写したものとされているが、今回は出典を特定することはできなかった。

書体や筆使いにも規則性・統一性がないことから、おおぜいの人たちがそれぞれの思いを込めて字を書きこの塚に持ちより納めたものであろう。

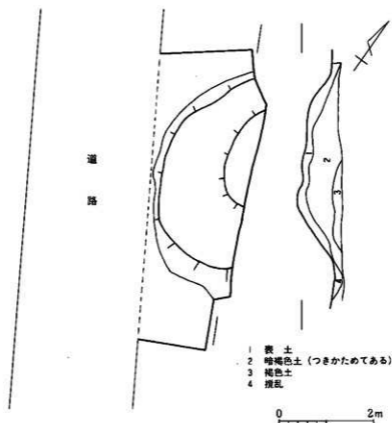
(2) 経塚原 2 号古墳

状況と結果

経塚原 1 号墳の南東 65m に 5 × 5 m の不整形の土の山がある。高さは最高部で道路から 1 m ほどの高さを持つ。今回は道路拡張により削平される南西側の 2 m ほどを調査した。

範囲が限られているためセクション調査の実であったが、その結果、盛土の中央は突き固められた土が 70cm ほどの厚さで確認できた。上部は草木の根により攪乱されていたが、人工的に盛り上げられた塚であることは確認できた。

しかし、周溝・葺石等の施設は確認できず古墳ではないものと判断した。さらには、盛り土の下部にもなんら遺構は検出できず、遺物の出土もなかった。したがって時期・性格とも不明ではあるが、『村塚の塚』と呼ばれていたとおり中村と三日市場の境界を示すものであった可能性が考えられる。



第 6 図 2 号 墳

(3) 経塚原遺跡

経塚原1号古墳から東に延びる市道経塚原牛首峠線の改良は現道の両側の拡張のみであった。そのため、試掘はグリッド調査で実施した。道路拡張部を開けた試掘グリッドのいずれでも、ローム面が現れた。ローム面までの深さは東へ向かうにしたがい、崖縁部へ近づく事もあって、徐々に浅くなった。しかし、いずれのグリッドでも遺構・遺物は確認できなかった。

ごくごく限られた範囲の調査であったため、この結果だけで遺跡の性格は判断することはできないが、中川に面する崖に近い尾根上には、先人たちの生活の痕跡はないといえよう。

IV 引用参考文献

飯田市教育委員会 1994『中村中平遺跡』

立正大学考古学会 1994『考古学論究』第3号〈特集・礫石経の世界〉

山梨県立考古博物館 1993 第11回特別展『山梨の経塚』

國學院大學文学部考古学研究室

1987 國學院大學文学部考古学実習報告第14集『物見処遺跡1987』

東京都三宅村伊豆

國學院大學文学部考古学研究室

1986 國學院大學文学部考古学実習報告第12集『物見処遺跡1986』

東京都三宅村伊豆

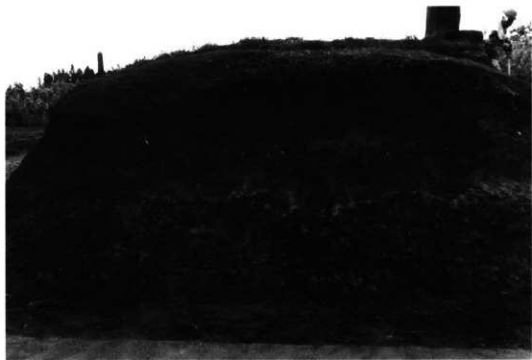
写 真 图 版



経塚原1号墳調査前



1号墳全景



1号墳填丘断面



1号墳填丘断面



I号墳主体部



I号墳主体部断面



1号墳主体部完掘



1号墳墳丘下周溝

2号墳調査前



2号墳墳丘断面

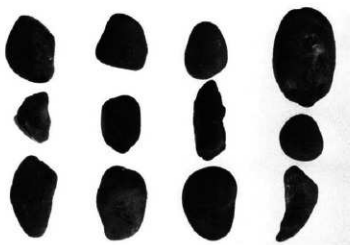


調査スナップ

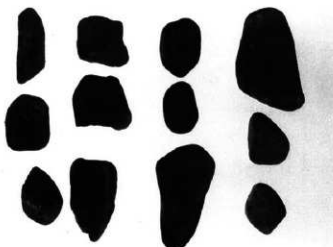


経石

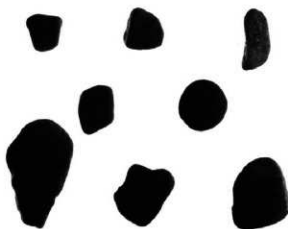
是



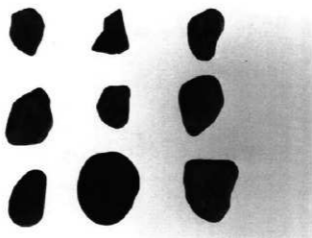
是



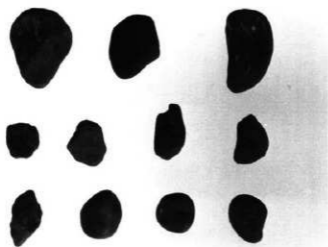
是



千

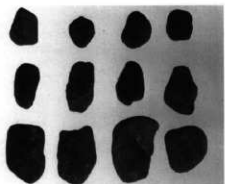


大

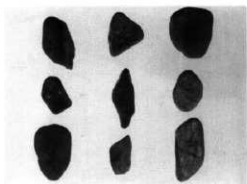


佛

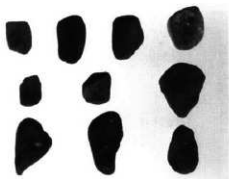




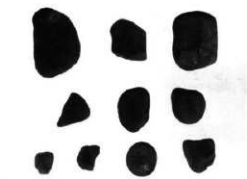
有



之



衆



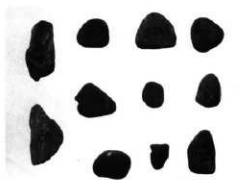
来



不



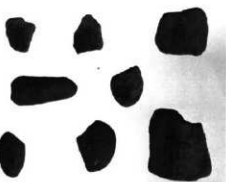
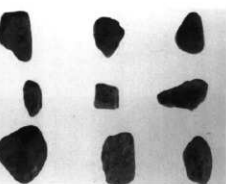
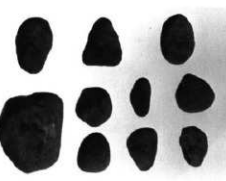
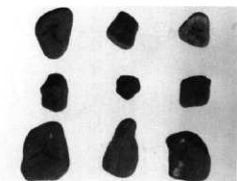
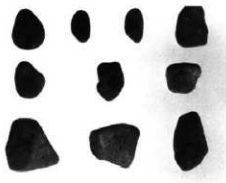
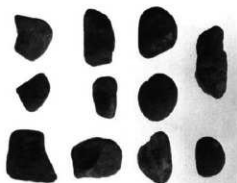
言

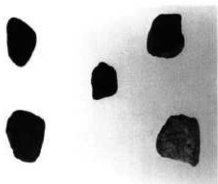


日

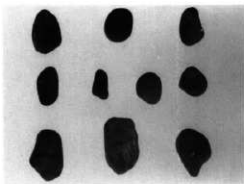


其

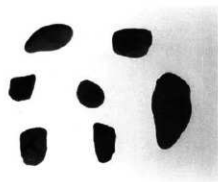




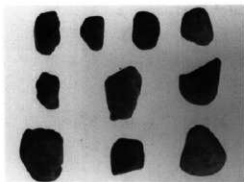
師



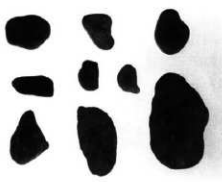
一



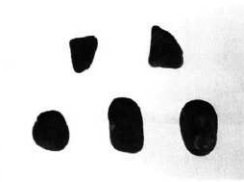
人



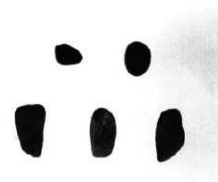
説



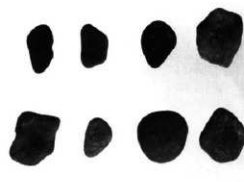
万



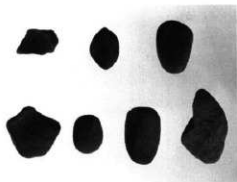
徳



上



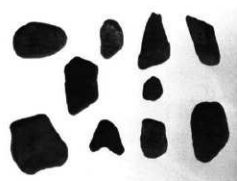
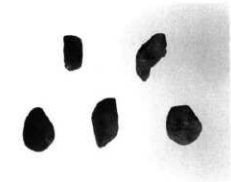
而



方



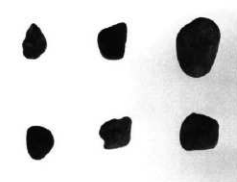
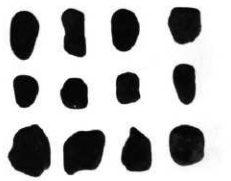
王



三



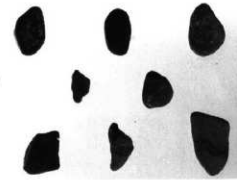
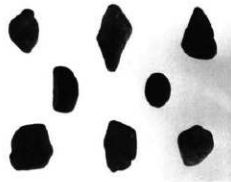
昔



十



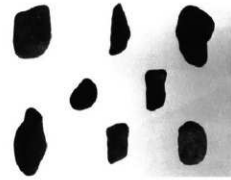
欲

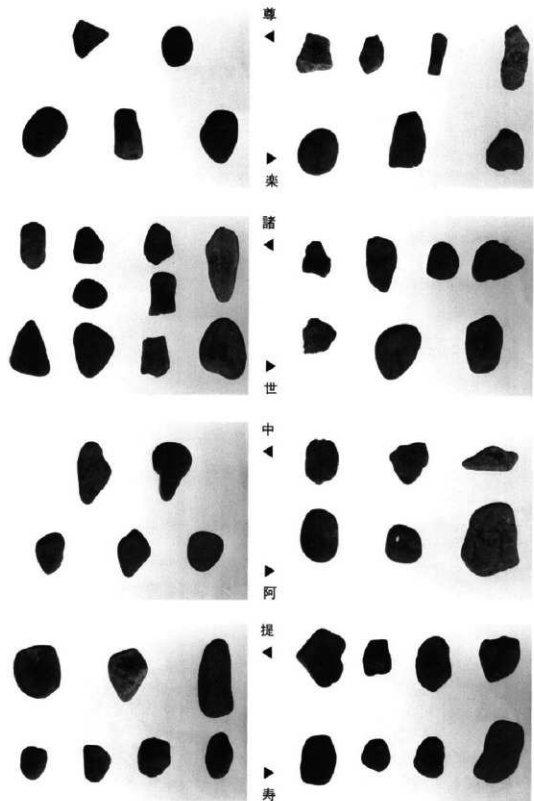


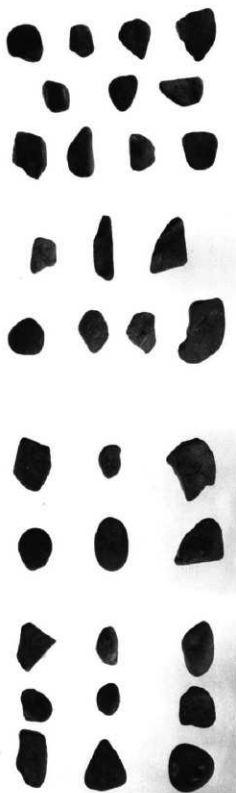
道



羅







生



薩



當

故

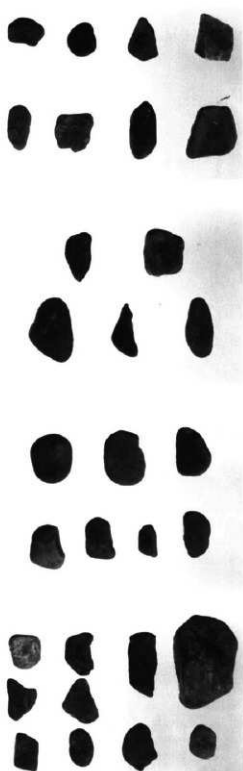


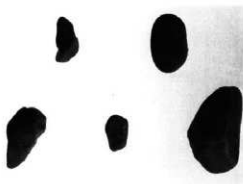
得

特

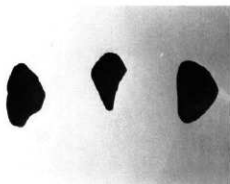


法

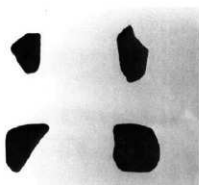




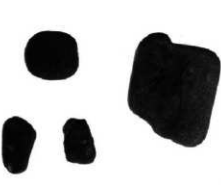
知



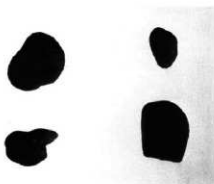
皆



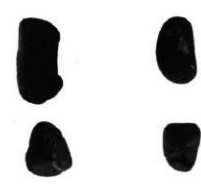
作



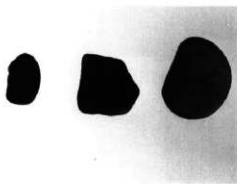
神



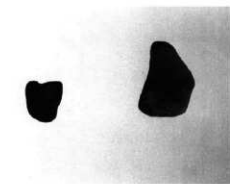
二



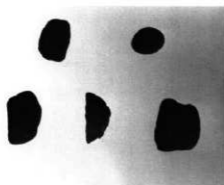
定



調



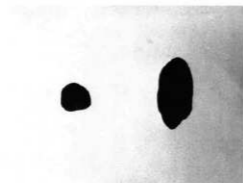
瑠



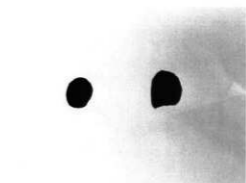
願



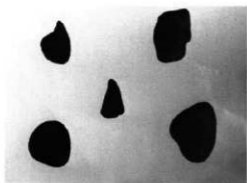
少



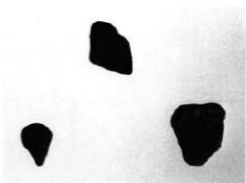
惟



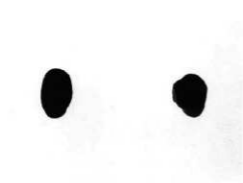
河



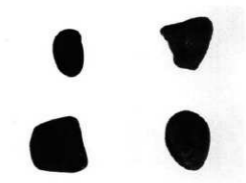
在



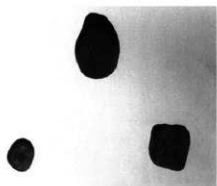
蓮



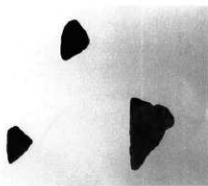
然



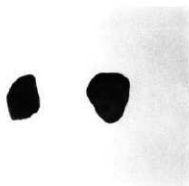
憂



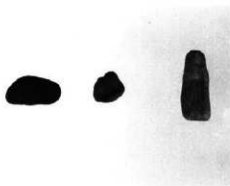
行



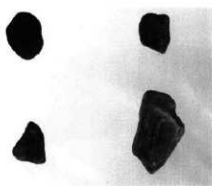
▶ 車



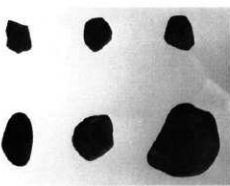
念



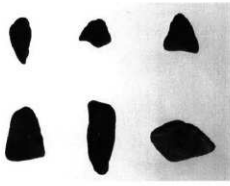
▶ 川



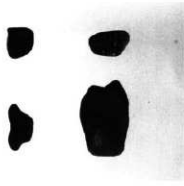
第



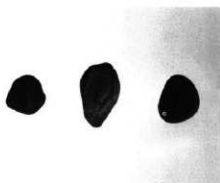
▶ 復



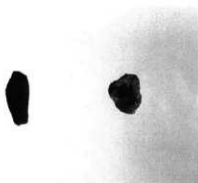
寶



▶ 入



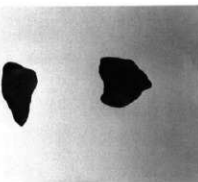
寛



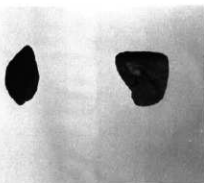
出



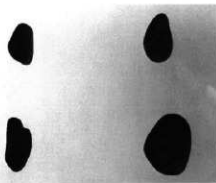
過



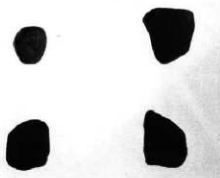
用



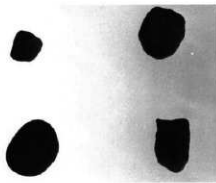
八



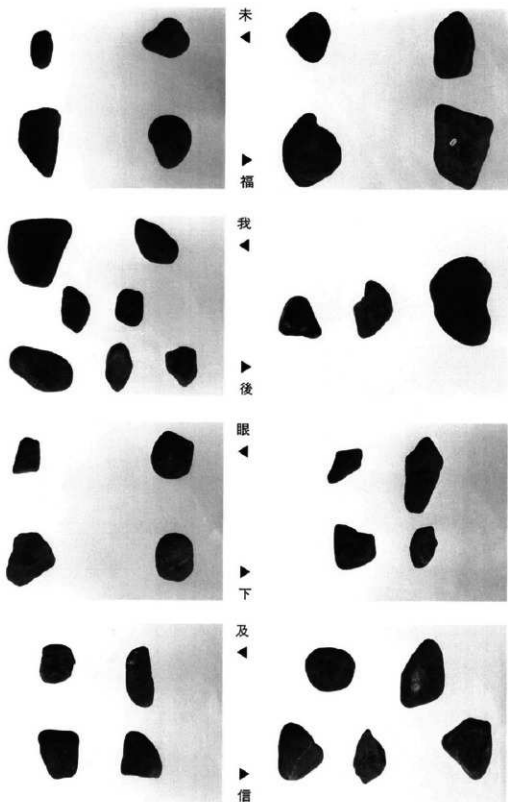
右

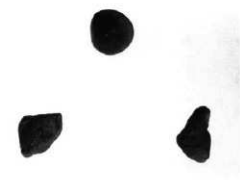


見

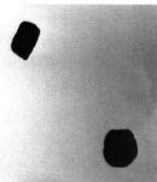


量

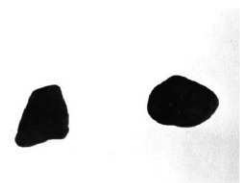




丘



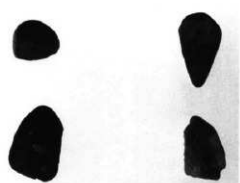
▶ 目



六



▶ 光



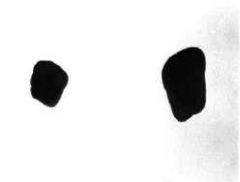
重



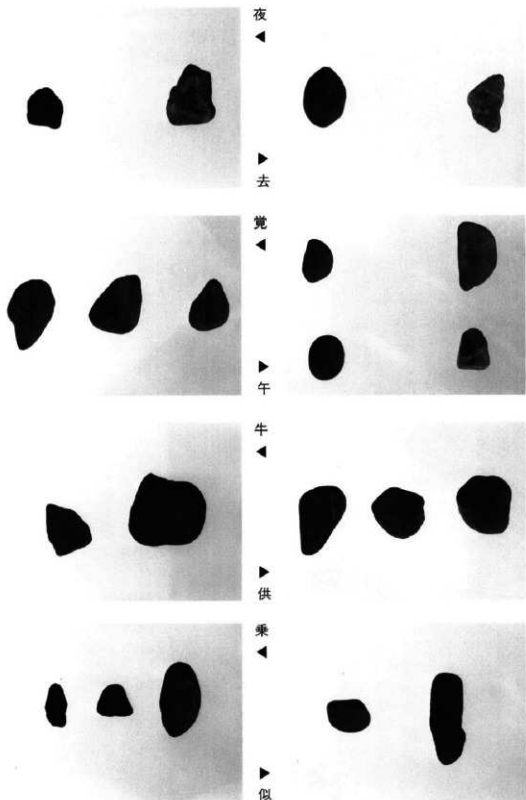
▶ 他



牧



▶ 讚



判読できなかったもの



梵字とみられるもの



抄 録

ふりがな	きょうづかばらいせき							
書名	経塚原遺跡							
副書名	三日市場経塚原牛首峠農道整備							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名								
編集機関	長野県飯田市教育委員会							
所在地	〒395 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 Tel0265-53-4545							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東緯 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
経塚原遺跡 1号古墳	飯田市中村 1573-4			35° 29' 09"	137° 48' 05"	平成6年 5月12日 ； 5月21日	100m ²	農道整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
経塚原遺跡 1号遺跡	経塚	江戸時代	経塚	経石				

経塚原遺跡

三日市場経塚原牛首峠農道整備に先立つ
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1955年3月 印刷

1995年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市教育委員会

長野県飯田市長野飯沼3145番地

印刷 新業社
